様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２４７４

研究課題名（和文）〈政治〉と〈経験〉の人間形成論的探究―プラグマティズムによる教育的正義の再構築―

研究課題名（英文）A Theoretical Exploration of "Politics" and "Experience" from the Viewpoint of Human Becoming: Reconstructing Educational Justice through Pragmatism

研究代表者
生澤　繁樹（Izawa, Shigeki）

名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授

研究者番号：７０４６０６２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，プラグマティズムの哲学・思想的方法の可能性と課題とを検討し，社会的正義の構築を求める〈政治〉と人間存在にとっての〈経験〉の在り方・諸相の再理解とをつなぎあわせる新たな人間形成論の理論的枠組みを構想することを目的とする。従来の〈政治〉をめぐる社会・政治理論と〈経験〉をめぐる教育理論の関心がともに交錯する「教育的正義」を再構築するための理論的基盤の解明に焦点を当てながら、社会的正義の実現をめざす〈政治〉が人間の〈経験〉の再構成と結びつく課題であると捉えたプラグマティズムの意義を現代的に再評価する。教育的正義を再構築するための〈政治〉と〈経験〉をつなぐ総合的な人間形成論への基盤を創出する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
プラグマティズムの哲学・思想に着目することで、現代リベラリズムの社会・政治哲学を援用する方法とは異なる、教育的正義の諸課題への応答が可能となった。プラグマティズムは、デモクラシーの実践のなかで、人間の生成や変容の過程とともにある〈経験〉と、社会的分断から社会的正義への視点の転換をめざす〈政治〉とを架橋する試みであり、人間の日常の生活経験の個別性や固有性に着目することから教育的正義を論じなおす視点を提供する。教育的正義に対する社会・政治理論と教育理論双方の取り組みに対して、個別の経験や具体的状況に根ざして探究する民主的公衆の形成を語るための理論的枠組みと条件を示した点に社会的意義が見いだされる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to conceive of a new theoretical framework for the human becoming or human formation that bridges the various aspects of “politics” and human “experience” that seek social justice by examining the possibilities and issues of the philosophical method of pragmatism from the classical to the contemporary. To achieve this purpose, I focus on elucidating the theoretical basis for the reconstruction of “educational justice,” where the interests of both social and political theory and educational theory intersect. In this study I reconsider the contemporary relevance of pragmatism, which realizes social justice to be an educational task that is linked with the reconstruction of human “experience,” and explore the standpoint of a theory of human becoming that goes beyond the mere application of social and political theory to educational theory, connecting “politics” and “experience.”

研究分野：教育哲学・教育思想史

キーワード：プラグマティズム　ジョン・デューイ　教育的正義　人間形成論　デモクラシー　探究する公衆　社会的正義　学校教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

家庭、子ども、若者の貧困問題にとどまらず、そうじて「格差社会」や「リスク社会」ともいわれる現代において、社会的正義の実現はさしせまった課題のひとつである。法、政治、経済、医療、福祉、労働、教育といった様々な領域における社会構造上の「不平等」や「不公正」（I. M. ヤング『正義への責任』岡野八代・池田直子訳、岩波書店、2014）をいかにして是正し、政治的に解決することができるかという社会的正義の構築は、国際的にも重要な関心事となっている。この問題は、政策形成や経験科学という実践的・実証的研究のみならず、社会・政治理論に関していえば、20 世紀英米政治哲学におけるジョン・ロールズの『正義論』（*A Theory of Justice*, 1971）の登場以降、多文化主義、フェミニズム、コミュニタリアニズム、シティズンシップ論、ケア論、デモクラシー論、グローバルな正義論等々において理論的にも盛んに検討されてきたテーマである（D. バウチャーほか編『社会正義論の系譜――ヒュームからウォルツァーまで』飯島昇藏，佐藤正志訳者代表、ナカニシヤ出版、2002；W. キムリッカ『新版　現代政治理論』千葉眞，岡崎晴輝訳者代表、日本経済評論社、2005 年など）。

教育哲学や教育思想の分野においても、社会的正義に関する理論的成果は、公正、平等、自由、デモクラシーといった諸概念や構想を問いなおす教育理論の一部として積極的に摂取され援用されてきた（D. Allen et al. eds., *Education, Justice, and Democracy*, The University of Chicago Press, 2013. K. ハウ『教育の平等と正義』東信堂、2004 など）。国内においては、宮寺晃夫の『リベラリズムの教育哲学』(2000)、『教育の分配論』(2006)、『教育の正義論』(2014) などの一連の研究を嚆矢として、リベラリズムの視点から教育機会の平等、教育の選択と自由、教育における多様性、共通性、公共性の確保等々にまつわる教育学上の問題群が検討や再考の対象となり、社会・政治理論の諸成果や議論が積極的に参照されてきた。

しかし、上記のような現実的課題と学術的動向があるにもかかわらず、社会・政治理論と教育理論の諸成果は、いまだ「教育をめぐる正義」――たとえば教育における正義（justice in education)、教育についての正義（justice of education)、教育のための正義（justice for education）など――の問題圏を豊かに考察するための有機的・統一的な探究理論として十分に結びあわされているというわけではない。かつて教育哲学者のハリー・ブリッグハウスが 21 世紀のはじめの言説状況を振り返りながら鋭く指摘していたように、社会的正義を論じる従来の社会・政治理論の諸議論は、とくにロールズをはじめドナルド・ドゥオーキンやジョセフ・ラズなど、現代の平等主義的リベラリズムを中心として活況を呈してきたものの、それらの成果が教育理論として、あるいは教育理論のなかに、十分に組み込まれるに至ったとはいえない議論状況が依然としてつづいてきた（H. Brighouse, *Egalitarian Liberalism and Justice in Education*, Institute of Education University of London, 2002, pp. 7-8)。

その後、2000 年代、10 年代に入り、教育の分配的正義についての優れた分析的考察をはじめ、教育の正義と平等についての研究が蓄積され、議論状況もまた大きく変わってきた（H. Brighouse et al., “Equality, Priority, and Positional Goods,” *Ethics*, Vol. 116, No. 3, 2006, pp. 471-497; E. Anderson, “Fair Opportunity in Education: A Democratic Equality Perspective,” *Ethics*, Vol. 117, No. 4, 2007, pp. 595-622；K. Meyer, *Education, Justice and the Human Good: Fairness and Equality in the Education System*, Routledge, 2014; 広瀬巌編・監訳『平等主義基本論文集』勁草書房、2018 年など)。しかしながら、正義をめぐる社会・政治理論と教育理論とを接続させる探究理論の探索は、いまだ難解なテーマのひとつでありつづけている。

社会・政治理論と教育理論とがうまく接続しえなかった理由のひとつには、社会・政治理論上の議論が、歴史的・文化的・宗教的・道徳的・美的経験とも関連しあう人間の生活や経験といった複雑かつ多様なコンテクストに即した正義への問いを削ぎ落とす、抽象的な個人を前提とした思考実験と、普遍的原理の構想に傾きがちだったことがある。またもうひとつの理由としては、ブリッグハウスが指摘するように、「教育的正義（educational justice)」の構築が社会的正義一般の問題として概括できない「さらに複雑な哲学的研究」（Brighouse, *Egalitarian Liberalism and Justice in Education*, p. 8）を要請する課題であったことも挙げられるだろう。現代における「教育的正義」の構築を考えるためには、社会・政治理論と教育理論とのあいだのこうした学術的議論状況のかみあわせにくさを再度問いに付しつつ、再び両者を接続させる新たな思考のアプローチを切り拓くことが課題となる。

ただし、その課題は、社会・政治理論の諸成果を教育理論として無前提に摂取したり、無批判に援用したりするということを意味しない。むしろ、人間が生きること、成長すること、形成され変容しつづけていくということに関わる教育理論的考察を深めるなかで社会・政治理論の諸成果を問いなおし、両者の接点と緊張関係とを考慮に入れた検討をおこなうことが必要となる。「教育的正義」を考えるためには、人間の〈経験〉の在り方・諸相の再理解を踏まえたなかで、いま一度〈政治〉への思考を練りなおし、可能にするような、総合的な人間形成論の探究を進めていくことが求められているのである。本研究のプロジェクトと一連の考察は、さしあたり以上のような状況認識と課題意識とを背景としながら開始された。

２．研究の目的

現代における「教育的正義」を現実的に構築していく理論的基盤を探るにあたって、本研究では、社会正義の構築を求める〈政治〉と人間存在にとっての〈経験〉の在り方・諸相とを再理解し検討することを課題としつつ、社会の法・制度・政治システムの組織的・集合的な行為に関わるマクロな〈政治〉の実相にせまる社会・政治理論の追究と、人間が人間となり日常を生活し喜びや苦しみとともに成長し形成され変容しつづけていくという〈経験〉の在り方や諸相にせまる教育理論の追究とをつなぎなおす、新たな人間形成論のための理論的枠組みを探究することを目的とした。そして、この目的を遂行するために、本研究ではとりわけ英米哲学における古典から現代へと至るプラグマティズムの哲学・思想的方法を検討の手がかりとした。プラグマティズムが社会・政治理論と教育理論においていかなる今日的重要性をもち、「教育的正義」を再構築するためにいかなる展開可能性と理論的諸課題をもちえているかという問いを中心的に考察することで、人間の〈経験〉の洞察と〈政治〉への思考とをつなぐ探究の可能性を探っていった。

〈政治〉と〈経験〉とをつなぐ新しい人間形成論的探究の手がかりとして、本研究がプラグマティズムの哲学・思想的方法に着目したのはなぜか。それは、なによりプラグマティズムが、社会・政治理論と教育理論の探究が互いに交差する領域のなかで積極的に参照され、理解されつづ

けてきたという理由による。さらにいえば、アメリカ・プラグマティズムの哲学者ジョン・デューイがデモクラシーという生き方や経験の共有をめぐる教育思想との豊かな結びつきのなかでみずからの政治思想を展開させていたように（R. B. Westbrook, *John Dewey and American Democracy*, Cornell University Press, 1991）、プラグマティズムの哲学・思想は、人間形成における〈経験〉の在り方・諸相をどのように再理解し再構成するかという問いを、社会的正義のための〈政治〉の実現や変革の課題へと連続的に結びあわせるものでもあった。したがって、本研究の学術上の貢献のひとつは、このプラグマティズムの炯眼に光を当てていくことで〈政治〉と〈経験〉をつなぐ人間形成論の視座を獲得する糸口を積極的に見いだそうとした点にある。つまり、プラグマティズムの哲学・思想的方法を検討対象とすることで、現代リベラリズム以降の社会・政治哲学の諸成果を単に摂取・援用するというアプローチでは答えられなかった「教育的正義」に関する複層的な諸課題に応答することが可能になるのではないかと考えたのである。

もっとも、従来の先行研究の諸成果を眺めれば、ブリッグハウスが「さらに複雑な哲学的研究」を必要とすると述べたように、「教育的正義」というより複合的で高度な検討作業をともなう問題関心に応じる学術上の研究成果がこれまでまったくなかったわけではない。20 世紀後半から 21 世紀はじめにかけて、ブリッグハウスの『学校選択と社会正義』（*School Choice and Social Justice*, 2000）をはじめ、エイミー・ガットマン『民主教育論』（*Democratic Education*, 1987、1999）、イーモン・カラン『市民を創造する』（*Creating Citizens: Political Education and Liberal Democracy*, 1997）、マーサ・ヌスバウム『人間性を涵養する』（*Cultivating Humanity: A Classical Defense of Reform in Liberal Education*, 1997）、メイラ・レヴィンソン『リベラル・エデュケーションの要求』（*The Demands of Liberal Education*, 1999）、スティーヴン・マシード『多様性と不信』（*Diversity and Distrust: Civic Education in a Multicultural Democracy*, 2000）、ランドール・カレン『アリストテレスと公教育の必要性』（*Aristotle on the Necessity of Public Education*, 2000）、ロブ・リーシュ『アメリカ教育におけるリベラリズムと多文化主義の架橋』（*Bridging Liberalism and Multiculturalism in American Education*, 2002）など、その多くはわが国では翻訳されず、紹介されることは少ないものの、先行研究として参照すべき優れた教育哲学的探究はたしかに存在していた（cf. Brighouse, *Egalitarian Liberalism and Justice in Education*, p. 27n）。また日本においては、先にも挙げた宮寺晃夫の『リベラリズムの教育哲学』、『教育の分配論』、『教育の正義論』といった一連の著作がこの問題に重点的に取り組んできた。しかしながら、そこでは不思議なことに、本研究が探究の糸口として着目するプラグマティズムの哲学・思想的方法が再評価されることはほとんどなかった。

もちろん、歴史や思想を眺めてみれば、プラグマティズムは決して一枚岩の立場ではなく、また万能な哲学・理論であるというわけでもない。むしろその立場は多様であり、プラグマティズムに対する多くの批判が存在してきたこともまた事実である。たとえば、デューイのプラグマティズムもその例外ではない。デューイは、『経験としての芸術』（*Art as Experience*, 1934）をはじめとする著述のなかで、人間の〈経験〉を諸々の「対立」、「抵抗」、「緊張」、「分裂」に満ちたリズムをもつものとして理解した。また、そうであるがゆえに、かれはまた、こうした経験の流動的な美的世界を枠づけてしまうような原理や単一の理論の探究を徹底して拒んだ。同じことから、デューイは、現実に生じる社会的正義の課題を認識していたものの、その一方で、社会的正義を論じるさいの「基礎づけ」となるような、本質的で固定した「規範」として正義の普遍的原理を導きだすことはなく、まとまった体系の構築を志向しなかった（P. T. Manicas, *Rescuing Dewey*, Lexington Books, 2008）。このような理由から、プラグマティズムの哲学・思想のなかに見いだされる「反本質主義」や「反基礎づけ主義」の徹底は、実際のところ、政治や道徳における「正しさ」や「真なるもの」を析出してくれるものではないと見なされることもあり、結果として、規範理論としての信頼性や妥当性に対して厳しい評価・批判も投げかけられてきた（C. Misak, *Truth, Politics, Morality*, Routledge, 2000 など）。

それゆえ本研究では、正義をめぐる社会・政治理論的、教育理論的探究のなかでなぜそれが肯定的に参照されてこなかったのかという理由を探るということも重要な課題として位置づけた。この課題を検討するにあたり、プラグマティズムの展開可能性や参照可能性を明らかにすることをめざすとともに、それがまた、ときには相容れない複数の多様な立場から構成されていることにも目を向け、プラグマティズムがいかなる理論的諸課題をもつものであったかという点を浮き彫りにすることも同時に重要な課題と見なした。本研究の学術的貢献がさらに認められるとすれば、それは、「教育的正義」の構築を語る理論的地平を切り拓くために、社会・政治理論と教育理論とを結びあわせるプラグマティズムの哲学・思想の可能性に着目するだけでなく、プラグマティズムの限界をもともに読みとり、その限界を乗り越えるような人間形成論の枠組みを新たに創出しようと試みたことに見いだされる。

３．研究の方法

以上に述べた研究目的を遂行するために、本研究では「教育的正義」の構築に向けた〈政治〉と〈経験〉のつなぐ人間形成論の理論的枠組みの新たな展開を探っていった。そのさい本研究では、具体的な三つの作業に分けながらこの課題についての検討をおこない、最終的に 5 カ年の計画のもとに考察を進めていった。

その三つの検討作業とは、次のとおりである。

2019 年度	検討作業①	「教育的正義」の構築という観点から見た従来の社会・政治理論と教育理論の課題の整理
2020 年度 2021 年度	検討作業②	プラグマティズムの哲学・思想的方法の展開可能性と課題の解明
2022 年度 2023 年度	検討作業③	プラグマティズムの哲学・思想的方法を踏まえた〈政治〉と〈経験〉を結びあわせる人間形成論の理論的枠組みの検討

まず 2019 年度では、「教育的正義」の構築が〈政治〉と〈経験〉をつなぐ人間形成論的視座を必要とする課題であり、この課題に対する社会的・政治的理論と教育的理論の到達点と限界を確認するという検討作業に着手した（検討作業①）。

つづく 20 年度と 21 年度では、検討作業②を中心に研究を進めていった。具体的には、プラグマティズムの哲学・思想的方法が、「教育的正義」の構築をめぐる社会・政治理論と教育理論に

おける従来の議論状況をいかに乗り越えるか、それとともにいかなる課題に直面するのかということを、それぞれ（a）哲学的・理論的なアプローチ（20 年度）と（b）歴史的・思想的なアプローチ（21 年度）から検討・評価するという検討作業に従事した。

最後に 22 年度と 23 年度では、主として検討作業③に示した検討作業に取り組んだ。とくに学校改革のなかでの「教育的正義」をめぐる英米圏の文脈と日本の文脈に固有なプラグマティズムの実践的展開に注目しながら、「教育的正義」の構築が必要となる具体的課題を考察し、〈政治〉と〈経験〉をつなぐ人間形成論のための理論的枠組みと諸条件の解明をおこなうことをめざした。なお本研究は、当初は 4 カ年の研究計画で研究を進める予定であったが、検討作業①と②の結果を踏まえた検討作業③の精緻化と、検討の過程において新たに浮上したいくつかの重要課題に取り組む必要性が研究上生じたため、期間を 1 年延長し、最終的に 5 カ年の計画で研究をおこなった。

上述した三つの検討作業は、すべて文献研究を中心的な方法として実施した。具体的な活動としては、文献調査と資料収集などの作業が基本となり、各年度、おもに学会・研究会等での報告や、図書・学会誌に掲載する論文等の執筆をおこなった。

また、研究を遂行するにあたり、随時、研究成果の公表・発信に努めた。そのさい、多くの研究者の指導・助言が得られるよう広く研究成果を検証の場に開き、必要であれば検討の方向についての軌道修正をおこなうようにした。

とりわけ、社会・政治哲学分野との重なりを多くもつ本研究の問いは、教育哲学や教育思想史の領域のみならず、教育学の他の関連領域とも交差し、政治思想や社会思想等の領域における問題関心とも重なっている。また英米圏やアジア圏の教育哲学の学術的動向とも交差している。そのため本研究では、そうした他領域との交流を念頭に置いた研究報告や国際学会での報告をも同時に意識して研究活動を進めていった。

以上の検討作業と活動をおこなうことにより、本研究は「教育的正義」の再構築といういまだ十分に果たされえなかった理論的難題に挑戦し、それを〈政治〉と〈経験〉をつなぐ人間形成論的探究というアプローチから応答していくことをめざした。

４．研究成果

【1】「教育的正義」の構築という観点から見た従来の社会・政治理論と教育理論の課題の整理

初年度の 2019（令和元）年度は、「教育的正義」の構築が〈政治〉と〈経験〉をつなぐ人間形成論的視座を必要とする課題であり、この課題に対する社会・政治理論および教育理論の到達点と限界を確認する作業をおこなった。具体的には、ジョン・デューイのプラグマティズムを再検討することにより、社会や政治に関する諸理論と教育や人間形成に関する諸理論の直面する課題がいかなる点で交差するのかという点を探っていった。この検討の過程において本研究が明らかにしたのは、とりわけ科学や技術めぐる問題が人間の生活や経験に深く関わりをもつ課題であると同時に、政治や社会の課題として追究されてきたという点である。科学と技術の問題は、知識や情報の格差や知の構成をめぐる権力の不平等の課題を考えるうえで社会正義の重要なテーマとなりうる。この問題は、近年では「認識的不正義」の問題としても指摘されている（M. フリッカー『認識的不正義――権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』佐藤邦政監訳、勁草書房、2023 年）。この知の構成や構造をめぐる問いに対して、生活や経験に根ざした公衆がいかに政治へと参加し関与していくことができるのか。初年度の最初の検討作業では、科学と技術をめぐる知への参加というこのテーマが人間にとっての〈経験〉の諸相と社会的正義をめざす〈政治〉の諸相とをつなぐ「教育的正義」の構築を求めるさいの重要な試金石となりうることが確認された。またこの点で、本研究では、具体的に「熟議」を通したデモクラシーがいかなる可能性をもち、いかなる限界に直面するのかということも同時に検討することができた。何のために教育的正義の構築が求められるのかという目的、またその実現の方法と手段には、依然として論争含みな多様性が存在しているが、そのなかで公衆を形成するという課題が教育的正義の構築というより複雑な課題と密接に接続していることが浮き彫りとなった。

【2】プラグマティズムの哲学・思想的方法の展開可能性と課題の解明

2020（令和 2）年度および 2021（令和 3）年度では、従来の社会・政治理論や教育理論の到達点および課題を踏まえて、プラグマティズムの哲学・思想的方法が教育的正義の構築をめぐる議論状況をいかに乗り越え、またいかなる課題に直面するのかという点を考察した。

まず、2020 年度の検討作業において確認したのは、プラグマティズムの方法が政治（学）と教育（学）の双方の領域を横断する問題解決の視点をもちうるということであった。とくに古典的プラグマティズムの検討をおこなうことで見えたのは、デューイの教育理論がしばしば歴史的には社会・政治的文脈を映しだす鏡面となっていたということである。そこでは、人間の教育や成長、生活経験における「対立」や「葛藤」が、社会的・政治的分断の問題と地続きのものであると捉えられていた。そこからさらに本研究では、人間の生に根をもつ〈経験〉における対立や葛藤と社会正義を求める〈政治〉における分断を解消する「教育的正義」を構想するにあたって、デモクラシー（民主主義）をいかに正当化し、いかに擁護するかという主題が、プラグマティズムの哲学・理論的アプローチにとっての重要な論点となっていることを明らかにした。またこのことと関連して、現代においては〈経験〉と〈政治〉のなかの葛藤や分断を解消するための民主的な教育を通じた／民主的な社会における「社会批判」が困難となっており、その（不）可能性を再考するということもおこなった。民主的な社会や教育のなかで社会を批判することの可能性と不可能性を考察するなかで、本研究ではネオ・プラグマティズムの限界とニュー・プラグマティズムの哲学の動向を参照しつつ、この問題に対してプラグマティズムの思想・哲学のなかに多様な哲学的・理論的立場がありうることを明らかにすることができた。

つづく 2021 年度では、上述のプラグマティズムの哲学的・理論的観点を踏まえ、教育的正義の構築に対するプラグマティズムの哲学・思想的方法の意義を歴史的・思想的なアプローチから検証し、これを評価した。プラグマティズムの直面する哲学的・理論的課題が社会批判の困難性と関わっているということは、科学と技術という知の構成をめぐる〈経験〉と〈政治〉のありようを問いなおすこととも密接に関わる重要なテーマであった。このテーマをめぐってプラグマティズムの方法の意義を評価するには、現代的課題のみならず、たとえば 20 世紀転換期における歴史的・思想的問題を踏まえた検討から得られる示唆は大きく、プラグマティズムの思想史から学ぶべき点は少なくない。そのため、本研究では、プラグマティズムの可能性とその歴史的・

思想的課題について考察し、そこから科学技術と人間という、政治社会と生活経験との問題が交差する現代の具体的諸課題を捉える視点を探っていった。
この検討の途上で明らかとなったのは、社会正義の構築を求める〈政治〉と人間存在にとっての〈経験〉とを結びあわせる課題において、デモクラシーを駆動させ、それを可能にするための「探究する公衆」の在り方とその形成過程がプラグマティズムの哲学・思想上の重要な焦点となっているということであった。また、デモクラシーと探究する公衆の有機的な関係性を探り、そうした関係性の人間形成論的意味を考究するなかで、国家や国家の教育を問うためにプラグマティズムの諸実践が歴史上いかなる役割を果たしたかということを検討していった。そこで論究できたのは、科学と技術の問題が、人間形成の過程を総合的に捉え、〈経験〉と〈政治〉をつなぐ知の構成の民主的な問いなおしを必要とする問題であり、また、そうした問いなおしの条件や状況を可能にする教育的正義の民主的な構築の過程についての議論が人間形成の理論的枠組みに組み込まれなければならないという点であった。

【3】プラグマティズムの哲学・思想的方法を踏まえた〈政治〉と〈経験〉を結びあわせる人間形成論の理論的枠組みの検討

2022 年（令和 4 度）と 2023（令和 5）年度では、前年度までの検討の結果を踏まえて、プラグマティズムの哲学・理論的考察と歴史的・思想的考察を発展的におこないながら、さらに学校改革のなかでの「教育的正義」の実現と、日本の文脈に固有なプラグマティズムの展開とに注目し、〈政治〉と〈経験〉をつなぐ新たな人間形成論の理論的枠組みと諸条件の解明に迫った。
まず、2022（令和 4）年度の研究では、教育的正義という課題から見た社会・政治理論と教育理論双方の課題の整理と、その課題を検討する方法としてのプラグマティズムの哲学・思想の展開可能性の吟味という、ここまでの検討の成果を足場としながら、おもに次の二つの検討作業をおこなった。第一は、前年度までの検討をより精緻なものとするために、プラグマティズムの哲学・思想の検討をさらに推し進め、たとえば今日のポスト真実の時代状況における人間の〈経験〉の変容と〈政治〉の変質の問題を明らかにし、物質的・社会的・人間的環境を通じた批判的な公衆の形成および人間形成の可能性を検討したことである。第二は、当初の研究計画において掲げていた学校改革や教育改革の文脈のなかでの教育的正義をめぐる英米圏の文脈と日本の文脈に固有なプラグマティズムの実践的展開に注目し、〈政治〉と〈経験〉をつなぐ人間形成論のための理論的枠組みと諸条件の解明を試みようとしたことである。ここでは、教室における民主主義から社会正義の実現がいかにして可能となるのかという問いを提起し、社会批判的教育実践の可能性を探るなど、研究代表者のこれまでの成果を土台としながら教育的正義の構築が必要となる課題を人間形成の場にそくして考察し、個人の一人ひとりの差異を承認し、真正さと真正さをめぐる葛藤や対立の生産的側面を尊重することのできる民主的な学校実践や教室実践が、〈経験〉と〈政治〉を結ぶ新たな人間形成の理論の創出にとって、非常に重要な役割を果たしうることを指摘した。
つづく 2023（令和 5）年度の研究では、これまでの研究成果と方向性を引き継ぎながら、本研究プロジェクト全体での成果と今後に残された課題を整理するとともに、検討の過程で新たに浮かび上がってきた、次の三つの個別論点についての検討に従事した。
まず、第一の検討では、プラグマティズムの哲学・思想の可能性を考察する一環として、デューイによる「情熱的知性」への着目に積極的照明を当てた。具体的には、民主主義の認識的機能をめぐる近年の議論の成否を検討することで、「知性」と「感情」の二元論的前提を問うプラグマティズムの視角が〈政治〉と〈経験〉を取り結ぶ人間形成論の考察の土台をいかに提供しうるかを解明した。この検討は、人間の〈経験〉と〈政治〉の双方において「ドクサ（意見、臆見、思いなし）」がいかなる機能を果たしているかということへの着眼を同時に促した。また同時に、この点が近年の教育学研究における「パトス」の問いなおし（岡部美香・小野文生編『教育学のパトス論的転回』東京大学出版会、2021 年）と呼応する課題であることも明らかとなった。
第二の検討では、昨年度の課題に続き、英語圏の文脈と日本の文脈との異同を踏まえつつ、教育的正義を実現するための教育実践や人間形成の過程を論じるさいのプラグマティズムの影響の解明をさらに試みた。とりわけ、生活指導、生活綴方、戦後初期社会科の展開を跡づけながら、そこで〈政治〉と〈経験〉の結節点がいかに描きなおされようとしたかということを検討した。そこでは、学校実践を通じた教育的正義の実現への希望と困難の諸相を確認するとともに、社会的正義の構築が人間の形成・変容・陶冶の過程と連続性をもつ教育的・人間形成論的課題として追究されうることが明らかにされた。
さらに第三の検討では、「科学教育の道徳的可能性」や「世界市民的教育」、「不正義の具体的な経験」（G. F. Pappas, “Empirical Approaches to Problems of Justice,” in S. Dieleman et al. eds., *Pragmatism and Justice*, Oxford University Press, 2017, pp. 81-96）といった、さらなる新たな観点から〈政治〉と〈経験〉を取り結ぶ人間形成論的枠組みの再考をおこなった。これらの観点への着目から、本研究では、世界市民的教育の空間という「教育的正義」を論じるための人間形成のより広い枠組みを論究する必要性を課題として再認識することができた。また、それだけでなく、出版 100 年後を迎えたデューイの『人間性と行為』（*Human Nature and Conduct*, 1922）およびこれから 100 年を迎える『経験と自然』（*Experience and Nature*, 1925）の再読可能性を新たに発見し、〈政治〉と〈経験〉を結ぶ人間形成論の枠組みと条件を検討するうえで、人間性と社会的環境の相互の変容可能性を論じるプラグマティズムの視点にいま一度着目することの意義を明らかにすることができた。
結論を要約すれば、プラグマティズムの哲学・思想は、デモクラシー（民主主義）の実践のなかで、人間の生成や変容の過程とともにある〈経験〉と、社会的分断から社会的正義への視点の転換をめざす〈政治〉とを架橋する試みであった。それは、私たちの葛藤や対立を含んだ人間の日常の生活経験の個別性や固有性に着目することから教育的正義を論じなおす視点を私たちに提供する。本研究によって見えてきたのは、教育的正義という課題に対する社会・政治理論と教育理論双方の取り組みに対して、日常の生活経験や個別の具体的状況に根ざして探究する民主的公衆の形成と、そうした公衆の形成への橋渡しとなるような、学校や教室を含めた人間形成の日常的実践が求められるということである。プラグマティズムは、人間の〈経験〉と〈政治〉を結びつけ、人間形成の探究として教育的正義の構築という課題を捉えなおすうえで、いまなお豊かな哲学的・思想的資源を提供しつづけているのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 生澤繁樹	４．巻 64
２．論文標題 民主的公衆と情熱的知性―プラグマティズムの政治的含意を読みなおす―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本デューイ学会紀要	６．最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅井健介・森田一尚・髙谷掌子・門前斐紀・桑嶋晋平・生澤繁樹・岡部美	４．巻 32
２．論文標題 パトスの語り方を問う	５．発行年 2023年
３．雑誌名 近代教育フォーラム	６．最初と最後の頁 143-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 広瀬悠三・藤井基貴・生澤繁樹・米津美香	４．巻 127
２．論文標題 世界市民的教育の空間を考究する―境界の内で／境界を越えて―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 126-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 生澤繁樹	４．巻 66
２．論文標題 書評：西郷南海子著『デューイと「生活としての芸術」――戦間期アメリカの教育哲学と実践』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本の教育史学	６．最初と最後の頁 160-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹	4．巻 22
2．論文標題 修繕される教育、呼び戻される近代―コロナ禍が加速させる連帯と分断―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 中部教育学会紀要	6．最初と最後の頁 89-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Izawa Shigeki	4．巻 online: 07 Jul 2022
2．論文標題 Cultivating classroom democracy: Educational philosophy and classroom management for social justice	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00131857.2022.2094244	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹	4．巻 63
2．論文標題 探究する公衆とプラグマティズムの真理論―公衆を探究へと導くものとは何か―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本デューイ学会紀要	6．最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野文生・生澤繁樹・河野桃子・嶋口裕基・谷村千絵・門前斐紀	4．巻 125
2．論文標題 教育哲学研究と博士論文の執筆―学位取得に向けて／を越えて教育哲学を展望する―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育哲学研究	6．最初と最後の頁 113-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡部 美香、平石 晃樹、生澤 繁樹、森田 伸子、小野 文生、古波蔵 香	4．巻 28
2．論文標題 『教育学のパトス論的転回』を読む（２）：教育哲学研究のさらなる展開へ	5．発行年 2023年
3．雑誌名 大阪大学教育学年報	6．最初と最後の頁 11～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90191	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato Morimichi, Matsushita Ryohei, Ueno Masamichi, Fujii Kayo, Kashiwagi Yasunori, Saito Naoko, Akiyama Tomohiro, Ono Fumio, Okabe Mika, Yamana Jun, Izawa Shigeki, Maruyama Yasushi, Okamura Miyuki, Hung Ruyu, Kwak Duck-Joo	4．巻 Published online: 28 Dec 2021
2．論文標題 Philosophical reflections on modern education in Japan: strategies and prospects	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00131857.2021.2017884	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹	4．巻 30
2．論文標題 原子力時代のジョン・デューイとプラグマティズム―「常識」と「科学」をつなぐ教育思想の可能性―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 近代教育フォーラム	6．最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹	4．巻 12
2．論文標題 プラグマティズムは国家の教育を問いなおせるか？―ジョン・デューイとラディカリズムの未来―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育学年報12　国家	6．最初と最後の頁 89-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 室井麗子・髙宮正貴・エディ・デュフルモン・生澤繁樹・藤井佳世	4．巻 29
2．論文標題 教育（学）と政治（学）―「翻訳」から捉える交差と懸隔―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 近代教育フォーラム	6．最初と最後の頁 131-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato Morimichi, Saito Naoko, Matsushita Ryohei, Ueno Masamichi, Izawa Shigeki, Maruyama Yasushi, Sugita Hirotaka, Ono Fumio, Muroi Reiko, Miyazaki Yasuko, Yamana Jun, Peters Michael A., Tesar Marek	4．巻 Published online, 16 Aug. 2020
2．論文標題 Philosophy of Education in a New Key: Voices from Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00131857.2020.1802819	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹・室井麗子・藤井佳世	4．巻 121
2．論文標題 教育哲学と社会批判の（不）可能性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育哲学研究	6．最初と最後の頁 179-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹	4．巻 28
2．論文標題 「熟議デモクラシー」から「妥協の精神」へ？―分断社会におけるエイミー・ガットマンの葛藤をいかに読み解くか―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 近代教育フォーラム	6．最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shigeki Izawa, Masaki Takamiya, Hektor K. T. Yan, Cheuk-Haqng Leung, Ren-Jie Vincent Lin	4．巻 4
2．論文標題 Reconsidering the Intersection of Politics and Education: East Asian Perspectives	5．発行年 2019年
3．雑誌名 English E-Journal of the Philosophy of Education	6．最初と最後の頁 81-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 生澤繁樹・髙宮正貴・甄景德・梁卓恒・林仁傑	4．巻 119
2．論文標題 教育と政治の交わりについて再考する―東アジアの若手教育哲学研究者とともに考える―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育哲学研究	6．最初と最後の頁 153-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生澤繁樹	4．巻 86(4)
2．論文標題 書評：嶋口裕基著『ブルーナーの「文化心理学」と教育論――「デューイとブルーナー」再考』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育学研究	6．最初と最後の頁 142-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　7件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Shigeki Izawa
2．発表標題 The Moral Potentialities of Science Education in the Atomic Age: Re-Reading Dewey’s Human Nature and Conduct
3．学会等名 Philosophy of Education Society of Great Britain, Edinburgh Branch Seminar（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 民主的公衆と情熱的知性―プラグマティズムの政治的含意を読みなおす―
３．学会等名 日本デューイ学会第65回研究大会・課題研究「民主主義の危機にプラグマティズムは、どう対応するか」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 世界市民主義と共同体主義のあいだで／を越えて―デューイのプラグマティズムから世界市民的教育の空間を探ることは可能か？―
３．学会等名 教育哲学会第65回大会・ラウンドテーブル４「世界市民的教育の空間を考究する――境界の内で／境界を越えて」
４．発表年 2022年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 指定討論：パトスをつかまえる、つなぎとめる―その(不)可能性と(不)必要性―
３．学会等名 教育思想史学会第32回大会・コロキウム６「パトスの語り方を問う」
４．発表年 2022年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 探究する公衆とプラグマティズムの真理論―公衆を探究へと導くものとは何か―
３．学会等名 日本デューイ学会第64回研究大会課題研究（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 修繕される教育、呼び戻される近代―コロナ禍が加速させる連帯と分断―
３．学会等名 中部教育学会第69回大会・公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 パトスと政治教育の未来―リベラルな教育が回避してきたもの？―
３．学会等名 日本教育学会近畿地区主催シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 「現在の歴史」としての過去とジョン・デューイ―経験を拡張し、解放することの意味を問う―
３．学会等名 アメリカ教育学会2021年度教育セミナー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 原子力時代のジョン・デューイとプラグマティズム―「常識」と「科学」をつなぐ教育の可能性―
３．学会等名 教育思想史学会第30回大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 プラグマティズムの格率と社会批判のための教育理論
３．学会等名 教育哲学会第62回大会・ラウンドテーブル「教育哲学と社会批判の（不）可能性」
４．発表年 2019年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 スペンサーを読み解く近代日本とジョン・デューイ―教育と政治における「翻訳」の磁場を再考するために―
３．学会等名 教育思想史学会第29回大会・コロキウム「教育（学）と政治（学）―「翻訳」から捉える交差と懸隔―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 生澤繁樹
２．発表標題 「勇気ある知性と責任」のために―公共的知識人としてのジョン・デューイとデモクラシーによる公衆の形成―
３．学会等名 第5回名古屋大学の卓越・先端・次世代研究シンポジウム「挑戦：人文学・社会科学研究の最前線」（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計9件

１．著者名 教育哲学会編	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 666
３．書名 教育哲学事典	

１．著者名 Masamichi Ueno ed.	４．発行年 2023年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 168
３．書名 Philosophy of Education in Dialogue between East and West: Japanese Insights and Perspectives	

１．著者名 春風社編集部	４．発行年 2022年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 500
３．書名 わたしの学術書	

１．著者名 松下晴彦・伊藤彰浩・服部美奈編	４．発行年 2021年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 336
３．書名 教育原理を組みなおす―変革の時代をこえて―	

１．著者名 春風社編集部	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 320
３．書名 対談集 春風問学	

１．著者名 日本デューイ学会編	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 340
３．書名 民主主義と教育の再創造―デューイ研究の未来へ―	

１．著者名 ヘレン・Ｍ・ガンター著、末松裕基・生澤繁樹・橋本憲幸訳	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 350
３．書名 教育のリーダーシップとハンナ・アーレント	

１．著者名 田中智志編	４．発行年 2019年
２．出版社 東信堂	５．総ページ数 360
３．書名 教育哲学のデューイ―連環する二つの経験―	

１．著者名 荒木寿友・藤井基貴編	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 248
３．書名 道徳教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

名古屋大学教員データベース https://profs.provost.nagoya-u.ac.jp/html/100009081_ja.html リサーチマップ https://researchmap.jp/shigekiizawa/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	The University of Edinburgh			